

倫理法人会に入会している経営者の方々  
は、純粹倫理を学び、実践することによつて自己革新を図り、健全で盤石な企業経営を目指しています。「自分が変われば周囲が変わる」を基底に、会社や地域をより良くしようという思いで、一人でも多くの経営者に学んでいただきたく、役員・会員諸氏は普及活動に勤しんでいます。

富山県倫理法人会会長の片山孝志氏もその一人です。「普及によつて数多くの出会いをいただき、話を聴くことで多くの学び・気づきを得ています」と語り、連日県内を仲間づくりに駆け巡っています。

和裁業を営む同県氷見市の「株式会社ラポージェ」を普及で訪れた際は、白石末子社長との会話から大切なことを学びました。

白石社長が会社を立ち上げる契機となつたのが29歳の時に患つた肺ガンでした。

術後、父親から「末子よ、おまえの命はあと3年あるかないかや。術後3年以上の生存率が25%というからな。その間、子供をちゃんと教育しておかないかんぞ」と過度な期待感を持たせないようにと、厳しさの中にも愛のある言葉をかけられました。

眠れない日々が続きましたが、父親の言う通り娘たちの将来を考えると、いつまでも弱気ではいられないと、リハビリを兼ねて和裁を開始しました。その後、体力も回復し、幸運にも再発の危険を脱したので。体力の回復に伴って次第に和裁にのめり込んでいくと、日本の置かれている和裁の現状に愕然とします。

## 普及は学びの場 経営者の体験を頂く



え・栗木 映

絶頂期には約2兆円産業でしたが、5千億円程度へと急速に減少。低賃金により和裁工房が海外へと流出していく有様です。「このままでは日本民族の象徴である着物を縫う人材と技術が消えてしまう」と、自分の命をも繋ぎ止めてくれた和裁への感謝もあり、会社を興そうと思いついたので。経営が軌道に乗ったところで、和裁士を多く輩出していきたいと決意しますが、一人前の和裁士になるには10年近い年月を要します。そこで着物専門の独自のミシンを研究・開発し、短期間の研修で一人前の和裁士を育て上げることに成功します。

当初は業界内から「ミシン縫いの着物は二級品以下」と敬遠されますが、今ではプロの舞台俳優さえも「ラポージェ」で製作した着物を購入するまでに至りました。白石社長は着物の伝統を守るため、あえて手縫いという伝統を捨て、現代的なミシン縫いへとシフトしていったのです。

経営の「経」とは、「道」や「理」の意で、時代が移っても変わらない原理原則・理念・基本方針を指します。「営」は、現実の状況に対し、どうしたら事業が好転していくか方策を考え、実行することです。両者が噛み合せて初めて経営が成り立つのです。とくに会社が進むべき方向、目的、理念を明確に掲げる「経」が第一義です。

片山会長は白石社長の体験に触れ、会社を興した動機を常に確認し、その思いを継続させることと、時代に合致した経と営の重要性を学んだ」と振り返っています。